

# 新農本ニアナーキー論 一

## 農業理論の構築にむけて

柏木 令二

はじめに

ひょっとしたことから、いわゆる玄米・菜食を主体にした食事にしてから四、五年以上過ぎていた。そしてこの間に「自然食ブーム」もおり、「健康」を売る各種出版はもとより大手出版から専門雑誌も出されている。デパートの一隅にも「自然食品コーナー」がもうけられ、他のまさに近代技術の精華たるきらびやかな商品と奇妙な共存をとりあげている。もっとも例の石油危機に端を発した不景気で、他の食品に較べて大旨かなり高価な「自然食品」は売れなくなり、一時のブームの様相からは大分後退してきているのも事実のようだ。だが、表面的なブームとは一応別に「食う」ことに対するある種の問い返しを前提に、生活スタイルの変革をも包含したラジカルな運動を展開している動きがあるのも事実である。

ここでは自然食について論述するのを目的にするわけではないが、私の私的ないわゆる自然食への関わりにおいて始めて「食う」という極め

て日常的・具体的事柄が問題となったわけである。

野坂昭如の科白ではないが、ココロラを飲みながらアメ帝と闘うという皮肉な情景も、いまでは闘いの色彩そのものが褪色してしまっているが、基本的な皮肉さの構図においては変りはない。「食う」ことは空気を吸うことと同じレベルの問題でしかなく、頭の中で肥大に観念化された政治課題と現実の巨大なココロラ資本の商品たる「さわやかなココロラ」とは矛盾することなく、これまた奇妙な共存をとりあげている。あるいは、日帝の東南アジア・朝鮮侵略反対を標榜しつつも、己の大口にする食品の大半がこれらの国々の低い姿勢をもとにした輸入品であるという矛盾。しかも輸入することが間接支配の構造という現実であるから、日々日帝の間接支配の片棒をいやおうなくかつがされているという事実。

こうはいつでも「食う」ことだけが政治経済的側面と、己一個の生理的・感覚的な側面とが矛盾するわけではない。挙げればきりがなし。私

外の「食う」ことへの自覚。つまり「食う」ことを個人的・生理的レベルだとするのは、生産という原因を論ぜず結果だけを問題にしている

に過ぎないということ。ともかく、私は私的には玄米・菜食を通して味覚の新たな発見・開発をなしつつ「私」が「食う」ことと社会・文化的属性を「発見」した。あまりに遅い「発見」ではあったが、自己の観念辯にわざわざされた観念的理論から具体性を有する理論へと、理論は転換されねばならないと考えるに到っている。私にとっての「アナキズム」も例外ではない。したがって、この具体性の理論を求める最初の問題意識が、「食う」ことを通じての生産＝農業の問題なのであった。

いわゆる農業問題が巷で云々され始めたのは、例の石油危機からの連動的反応であった。石油だからまだガマンできるが食糧だったら大変だ、という類いの素朴ではあるが本能的な意識が底流にあったのは確かだろう。というより、日本の高度成長社会が徹底的に農業を切り捨てたところろにあり、いかにもろい関係構造に立っているかが白日のもとにさらされ、あらためて食糧の生産面に眼が向けられ始めたのが実情だろう。農業切り捨ての旗印であるいわゆる国際分業論を正面きって主張する者は政府財界や近代主義者にもいなくなつた。まさに掌をかえしたような見事な転換がなされたかみえる。食糧の国内自給ないし自給率の向上は「世論」であるかのようにだ。だが、安易に農業を切り捨て国際分業論を自明とし、はたまた状況の変化で極く安易に農業見直しを云々するのは、何ら問題解決への手がかりとはならず安直な状況追従主義と非難されても仕方あるまい。ハレンチであろうと「国民総ぐるみ」的な農業に対する態度の「変化」には、確かに根の深い諸問題がからんでいる状況が指

摘できるだろう。

農業問題が問題視されることを思いつくまま掲げてみると、一、いわゆる環境破壊の増進に対する人間の生存基盤についての危機意識。一、人口爆発が確実に予測され、地球の天候不順が常態化し、そこからくる世界的な食糧危機感の増大。一、帝国主義によってモノカルチャー化された第三世界といわゆる先進工業国との関係、南北問題の激化。一、石油などの資源ナショナリズムが勃興してきたこと、などがあげられるだろう。あるいはバラ色につつまれた未来学の破産と、高度工業化社会に対する深刻な反省の有力な材料とした農業を軸にした文明論の展開、というような傾向で問題化されてきている。だから現在の農業問題は、従来の経済学のレベルにおさまりきれない問題としてある。

以上のように、農業問題には従来とは異った新たな地平から多様な問題がくまこまれていくわけだが、この小論では、革命論の一環としての農業理論にアプローチするための基礎作業を掘り起こしてみたい。そこでまず、農業問題の歴史的・思想的観点から問題を概観してみることにする。

### 一 マルクス主義の農業理論から

手始めにマルクス主義にとって農業問題とは何であり、どのように把握されていたかを見てみよう。

まず「資本主義的社会経済的構成の内部での農業全体、あるいは資本主義経済制度との関連における農業一般、さらに資本主義の影響下における一般的傾向」を位置づけることがマルクス・レーニン主義的農業理

論の基本問題であり、そして、「農業諸関係の階級的性質を確定し、その発展の方向を明らかにすることこそが、われわれの農業問題研究におけるもっとも緊切な任務なのだ」と神山茂夫は述べている。農業一般が問題になるのではなく、資本主義との関わりにおいて農業が問題となるのである。「なぜなら、レーニンにせよ、カウツキーにせよ、農業問題として論じている内容は、実は、資本主義社会において依然として存続している農民層が経済的にはどのように位置づけられるか、または政治的には、特にプロレタリアートに対しては、どのような勢力となるか、ということであった」ところが「資本主義のもとでは、価値法則の作用や、また資本蓄積の一般法則の作用によって、農民は徐々にではあるが、たえず両極に分化し、分解する」ということで農民が完全に分解し、工業と同様に二大階級が成立するとすれば、個有農業問題は本質的には解決されたことを意味する。要するに、ある資本主義的社会構成体において、そこに農民層の広汎な存続が前提的に指定される場合にひきだされる問題が、農業問題とされるのである。

基本的なマルクス主義の把握によれば、資本主義の全過程は、「外国貿易を重要な一源泉としつつ形成された資本が、封建社会の胎内で、商品経済の展開によって増幅した社会的生産力を前提として、農業から工業を分離しつつ、工業を包摂し、資本家的生産として自立的過程を設定し、資本の蓄積様式を展開してゆく過程である」<sup>5</sup>。であるから農業は資本主義のもとにあって、あくまでも工業の被規定者となる。これがマルクス主義における工業と農業の資本主義体制下での関係の認識である。だから中国の「農業を基礎とし、工業を主導とする」国民経済発展の理

つつ、徐々に成長してブルジョアのユニケル的経営となるプロシヤ型を提出している。これに対する実践的結論は、経済の発展段階等に規定されたものの、アメリカ型Ⅱ農民型の道へと闘いが組まれねばならないという結論がひき出される。しかし、この実践論の到達点はやはり「農業問題の実践論の分野におけるレーニン主義の成立を示す」といわれる社会主義労働同盟論に集約されているといえるだろう。

レーニンは帝国主義段階の革命はブルジョア革命ではなく、社会主義革命であることを明らかにし、従来ブルジョア革命と見なされていた農民革命が、帝国主義段階における社会主義革命の重要な構成部分として位置づけられ、農民革命が資本主義の揚棄によってのみ遂行されることを明らかにした。ここに社会主義革命は、労働同盟にもつく革命として規定されたといわれる。論理的には整合しており、農民革命が一見格上げされたかみえるが、問題は労働同盟の形成主体が何であるかという点だ。「資本主義のもとでの農業・農民問題は、あくまでも先進的な労働者階級が、農民を同盟軍として獲得する問題」なのだから、農民に対して工業プロレタリアートが主導する形態を有する実践論であることに変わりなく、農業が工業の被規定者の如く、本質的には農民は労働者階級にとって外在的存在なのである。つまり、レーニンの農業理論の到達点たる労働同盟論は、カウツキーから受け継いだ資本主義発展一元史観という歴史観をつらぬく、一本の赤い糸に本質的にはくりくり上げられる理論を骨にしている。その上で、工業プロレタリアート主体の革命像にとって戦略的価値を付託させた論理概念としてひき出された労働同盟であるとはいい得ても、実体概念として出されたものではないと言え

論のごときは、むしろマルクス主義の枠外にはみ出た新しい理論と考えた方が論理的整合性はある。こうした農・工の位置関係からみて農業を主体とした農業からの内在的な発想・理論展開はマルクス主義にとって当然稀薄であり、むしろ無縁なのであるといつてよいだろう。また農民層に対する基本認識においても、「農民もまた、勤労者として革命的なすぐれた力をもつが、反面ではおくれた小生産につながる中間階級である。この点で、農民は保守性をもち、また他の階級への依存性をもち、私有性も強く、分散していて組織性の点でも劣っている」というような認定をして、労働者階級の指導が必要なことを論理化し導き出してくる。マルクス主義によれば、農業・農民といえど資本主義に包摂されるのは避けられないことであり、ロシア・ナロードニキのようにミール（農村共同体）やアルテリ（職人組合）を基礎にした資本主義を回避して直接社会主義化を目指すような思想は、社会構成体の資本主義的進化に無益に抗する反動となる。この際いわれる農民とは資本家でもなく賃労働者でもない小土地所有者として指定されているから、この農民層は、資本主義の進展に伴って資本家的大経営農民と農業賃労働者との二極に分解されるのは不可避であると考えられる。この有名な二極分解論の論理基底にあるものは、所有概念を軸としたものである。だから、ここにおいては農・工の本質的差異は存在しない。

このようにマルクス主義における農業問題は、土地所有の形態いかんが問われることになる。これにはレーニンが『ロシア社会民主党の農業綱領』で、土地の国有化（旧土地所有の農民的破壊）というアメリカ式の形態か、あるいは、農民に十ヶ年の最も困難な徵発と隷属とを宣言し

るのではないか。

ブルジョアとプロレタリアートの二大階級の中間者としての農民は、いづれはどちらかの階級に吸収・発展するとされるわけで、この論理展開からすれば、レーニンの労働同盟には農民の自己否定のモメントが存在しなければならぬ。でなければ戦略的概念を越えるものは何も存在せず、農民が利用対象に過ぎないことになる。

そもそもマルクス主義にあっては、経済学的なカテゴリーとしての貧農プロレタリアートの概念は存在しても、それは資本の論理を展開軸にした工業サイドからの発想であり、自然有機体を労働対象にする農業といえど工業との本質的差異は認めない。問題はあくまでも資本主義の過程にある農業なのか、それともそれ以前の段階のものなのか、ということにある。だがここには、資本の無限運動性なる概念の存在を前提に、農業の生産性は工業と同様に資本の運動に包摂・規定されるのは当然としても、人間の支配圏には収まり切れてない自然を対象とする農業生産を、人間がつくり出した人間のコントロール下にある工業生産との差を認めずに資本の運動にくみこむことは、論理的には、完璧な自然支配が可能なることを前提にしていることになる。この点からもマルクス主義における科学信仰の色彩は否定できなくなる。

ではなに故に、農業と工業との本質的な差を認めずに、農は工の個別特殊問題の位置にあるのかといえ、資本の論理・運動という概念に社会構成体の運動法則を非限定的に収斂させたことにあるのではなからうか。飛躍を恐れず言えば、資本の論理・運動の概念の限界ないし限定性が付与されねばならない、とだけここでは言っておく。



ついでに、権力揚棄の革命は都市中心の発想をもつものではないことを示唆しているわけである。

さて実際に農青運動が農村で建設的な意味合いをもたせて使用した理論的概念の中心をなすものが「自給自足」の実行にあるわけだが、この用語はいくつかの意味を付託された言葉である。一、都市中心の労働運動とりわけ経済主義に陥ったサンジカリズムに対する批判を通しての対置概念であること、二、民衆運動における経済的直接行動を示すものとしての概念であること、三、資本主義化の遅れている側面をもつ農村は、都市に較べて自給自足の色彩を強く持っていることから、戦術的に交換経済を排棄する経済上の手段としての意味をもたされていること、四、△農村の中から▽の革命を指向するための地理区画（コミュニティ）の経済的様式としての意味、というようものが含まれていると考えられる。かようにこの用語に含まれている意味の整合性に欠ける憾みはあるが、静態的ではなく、現実の中でダイナミックに使用したところに価値をみるべきだろう。でなければ農青の「自給自足」論にはそれが実際可能であるのか否かは問わずに、「人はその土地で生活する。生活するが故に、そこで有用なものを生産する」という程度の答しか出し得ない弱さだけが浮き出ることになる。もつとも、都市に絶望したから農村を選んだのだ、というような非難はあながちはずれてはいまい。彼らの答の貧困さが逆に示しているからである。何故なら、現実の都市の労働者にとって彼に「人用なものを生産する」余地は無い。彼らの資本に規定される生活の幅は農村よりも明らかに狭く、生活はまさに職業そのものに侵蝕されているから「選べる」のは多少の職業の種類くらいであ

ろう。この点からして農青イズムの基底には農村偏重の思想があることは否めない。正当には、農村偏重というより、△農民を中心▽にした都市に対して農村の質的転換を目指しかつ拡大してゆく方向性を有する△農村からの発想▽ではなかったかと思うのだが。

農青の「自給自足」概念は、資本主義に対するアンチ・テーゼにあることはいちもめない。ただ困難な問題は、労働者の△農村▽と農青流の△都市の農村化▽の論理を工業プロレタリアートの中からもひき出さねばならないことである。それに、実際には△農村的社会▽が残存していることを論理的な基盤にせざるを得ない農青イズムが、今日の先進資本主義国のような△農村的社会▽を崩壊してしまったところに、農青流の「自給自足」概念を定立させることはなかなか困難であろう。だが、稀有な革命運動を展開した農青イズムは、高度工業化社会の行詰り状態と中国流の農・工併進社会の進展からみて、ある種の予言的運動であったともいえるようか。ともあれ五〇年後の今日の視点から見直される価値を有する革命運動であったのだ。

### 三 農本主義における農民・農村問題

日本における農業問題、とりわけ農民問題を考察するに際しては、いやでも避けては通れない関門がいわゆる農本主義思想なのである。専断的に天皇制ファシズムの反動思想として黙殺してしまふにはあまりにも大きな根の深い歴史的な存在であった。日本人の思考の基底に通ずる何かを有していたのではないか。思想としての農本主義総体が、ここでの直接の考察対象ではないし、私にそれだけの力量もない。おのずと本稿

の行論に限定されたところにのみ言及される。

農本主義と一言でいっても、言葉に内包された概念・意味合いには極めて多彩なところがあるが、巨大な足跡を残したわりにまとまった研究が少ないように思われる。その中でいまや古典になったかの観がある昭和一〇年発行の桜井武雄著『日本農本主義』に依って大枠を概観してみたい。

講座派的観点から桜井はそのなかで、「農本主義イデオロギーは、資本制生産関係の生成過程に於て、くずれ行く封建Ⅱ農奴制関係の地盤の上に発生したものである」とその発生過程を捉える。この農本主義は「農村における半封建的体制を基底としてこの上に生ひ立った日本資本主義の矛盾にみえる発展段階に照応し、これを反映している。この発展の、それぞれの段階に相照応して、農本主義はその相貌・形態に幾変容をみせたけれども、しかし帰するところは、この国の資本主義が依拠してきた基本地盤たる農村の半封建制を代表・擁護・礼讃せんとするものにはかならなかつた」と桜井は規定している。逆にいえば、農業こそが全生産の基礎である封建制下においては、「農本」は自明なことといえるわけだ。だから「農本思想が真に自己自身にめざめる。言いかえれば農本思想から農本主義へと転化するのには、封建社会の胎内に商業資本・高利貸資本が発生し、『貨幣の権力』が発生するにいたってからの後のこと」となる。つまり単なる生活生産の思想から政治的主張に転化した「主義」として変質したものが農本主義に他ならないと捉えられる。「思想」から「主義」への転成に本質の連続性をみるか、断絶・変質をみるか、は意見が異なるところだ。

農本主義の発展段階は桜井によれば次のような区分になる。

封建時代（封建末期）の農本思想——荻生祖来、太宰春台、山片蟠桃、二宮尊徳。  
原始蓄積時代の農本思想（転形期官僚の農本主義）——大久保利通、井上馨、松方正義、品川弥二郎、谷千城。  
資本主義興隆期の農本主義——横井時敬、河上肇、酒匂常明。  
農業危局開始（明治四〇年）以後の農本主義。  
小ブルジョア農本主義——横田英夫、橋孝三郎。  
地主「村熟」型農本主義——山崎延吉、加藤元治。  
地主Ⅱ「帝農型」農本主義——岡田暁。  
官僚型農本主義——後藤文夫、遠山信一郎等。

この区分にみられるように、例えば、大久保や井上などの資本主義の早期促進・形成をはかるための大農論と資本主義の否定をはかる橋や権藤などでは全く矛盾する面をもっている。だがしかるに、この両者に共通するのは産業としての農業の直接の発展を目指すのではない点である。たしかに「資本主義興隆期」からの段階においては、農業が国の基幹産業の地位からずり落ちるに反比例して、農業防衛を主張する農本主義が現出している。だがその内実は、二宮尊徳のように農業自体の生産力を高めてゆこうとする考えののではなく、むしろ資本主義化にともなった旧秩序の崩壊の象徴ともいえる「都市の腐敗」に対する一方的な村落の讚美、旧農村社会の観念的美化的側面を強くもっていた。ただ桜

井のように、このことをもって経済思想から政治的主張に転じたところに農本主義の生涯をみるのは、やや表面的すぎる感がある。例えば、佐藤信淵は「人民性命は食物をもって保統して、食物は、耕種法を修めて作り出す者なり。ゆえに百姓は国家の根本にして政事の基原なりと知るべし」(農政本論)ともいい、また「それ農は国の本なり、勸農の政を修めざれば国家ますます衰微に及ぶべし。これ百姓を勸めて農業を励ましむるは国家の第一たるゆえんなり」(経済要録)といっている。また、太宰春台の「民の業に本末と云ふことあり。農を本業といひ、工商買を末業といふ。農民少なければ国の食衣乏しくなるゆえ、先王の治めにてはことに農民を重んぜらる」(経済録)という風な考えに対して、当時の鎖国の経済事情からのみこれを説明し当然視して農本思想の時代精神性を指摘するだけでは十分ではない。何故なら、荻生徂徠のいう「本を重んじ末を抑ゆることこれ古聖人の道なり。本とは農なり、末とは工商なり。工商盛んになりて農業衰うるときは、代はとかくかたのごとくなりゆくことこれまたあきらかなること知るべし」という文章にみられるように、農業に時代性を越えた $\wedge$ 聖なる永遠性 $\vee$ をみているからである。したがってむしろ、この $\wedge$ 聖なる永遠性 $\vee$ が基底に存在するからこれを戦略的に利用するイデオロギーが生じたと考えた方が難が少ないただろう。昭和期の農本主義は明確に政治イデオロギーとして作用したのだが、ここには右派勢力による労働運動否定 $\downarrow$ 都市否定 $\downarrow$ 資本主義否定 $\downarrow$ 農村擁護(郷土の高唱)と展開する回路がしかれ、人間の $\wedge$ 生成の原理 $\vee$ として農村が位置づけられ、ある者にとっては国家をも越えた「社稷」と考えられた。

例えば、権藤成卿は「世界皆な日本の版図に帰せば、日本の国家といふ観念は不必要に帰するであろう。けれども社稷といふ観念は取除くことは出来ぬ。国家とは一つの国が他の国と共立する場合に用いられる語である。世界の地図の色分けである。社稷とは各人共存の必要に応じ、先ず郷邑の集団となり、郡となり、都市となり、一國の構成となり、：各国悉く基の國境を撤去するも、人類にして存する限りは、社稷の観念は損減を容るべきものでない。他人がありての自己、他家がありての自家、他郷邑がありての自郷邑、他國がありての自國、此理は國家觀の大綱である。」(自治民範)という $\wedge$ 國家を超えた $\vee$ 社稷をうたい上げた。この文脈に侵略主義の息づかいのみを感じとり非難するのは當を得まい。明治以来の中央集権的國家主義(権藤の表現ではプロシヤ式國家主義)は、農村を犠牲に成り立ってきた。昭和初めの不況にあつて「是の不安危虞の現状中において、一入不安危虞の深きは農村である。我國に於ける農村は國の基礎であり、成俗の根源である。現在我農民は総人口の半数を占め、且つ全國土の大部分は其手に利用され、國民の主食物は勿論、工業原料、商業物資の多数も皆農民の力に産出されている」(農村自救論)。ここに社稷の存在形態としての農村が投射されているのは容易にみとれるだろう。ちなみに「社」とは土の神、「稷」とは五穀の神のことである。後には部落を意味するものとなり、さらに拡大して諸侯の社稷となり、天子の社稷となつた<sup>2)</sup>。あるいは橘孝三郎のよう「事実上」土ヲ亡ボス一切ハマタ亡ブ」：：：実に農本にして國は始めて永遠たり得るので、日本に取つてこの一事は、特に然らざるを得ないのであります。日本は過去たると現在たると將にまた将来たるを唱はず、

土を離れて日本たり得るものではない」のであつた(日本愛國革新主義要するに「日本資本主義の發展が終始農業部門の犠牲においてなされ、また國權と結びついた特惠資本を枢軸として伸びて行ったために、工業の發展もいぢるしく跛行的となり、そのために、明治以後この急激な中央の發展にとりのこされた地方的利害を代表した思想がたえず上からの近代化に対する反撥として出<sup>3)</sup>きた側面は注目されねばならない。丸山真男によれば、日本フアジズムは天皇を中心とした絶対主義的國家權力を強化させ、國權的なものを強化して行く方向と、他方では日本という觀念の中心を國家ではなく郷土的なものにおこうという流れの二つが存在した。この後者が昭和初期の農本主義を代表したわけである。

昭和期の農本主義が地主-小作の階級対立を緩和する役割を果すものとして地主に受容されたのは当然としても、小作人までも抱きかかえていたのも事実である。それは何故かというに、農本主義者の思想を貫いている発想法と、受け手である農民の伝統的発想法との間に共通するな<sup>4)</sup>かが存在したからだ。その共通するものは「郷土主義の論理」だとい<sup>5)</sup>。その「郷土主義の論理」とは、重農主義に対して農本主義の一つの特徴をなす「共同体的発想法」から導き出される。即ち社会とは「一村一家」の共同体 $\parallel$ 郷土のことであり、これを度外視しては國家も個人も存立し得ない。「郷土」は、全人間の心情によって統合された「自然而治」の世界であり、規範意識のない「無為自然」の共同体なのである。そこでは生活が窮乏化した場合には、村内の階級関係や制度に眼が向けられるのではなく、心情的な「働き主義」によって乗り切れようとする。また一方で、徳川封建性の隣保制度を受けついだ法律無用の擬自然

支配の小世界をも現出させた。つまり、人間を自然の一部に入れ、自然を規範として人間を把握する発想に裏打ちされていた。西欧の近代思想の如く、人間と自然とを対置させる発想とは根本的に質を異にしているものである。この発想は歴史的カテゴリーである「農本主義者」の枠内に入るわけではないが、徹底的な封建制の否定者であつた安藤昌益のような $\wedge$ 農を本 $\vee$ とする思想の根底に存在するものであつた。

農本主義の発想を日本人の伝統的な心性とみなすか、あるいは単に社会経済的なモメントによって限定づけられた時代的なものとみるかは、意見の別れるところであるが、もとより立論を単純に二分化できるものではない。ただ農本主義ないし思想が、圧倒的大衆動員に成功した $\wedge$ 事実の重み $\vee$ と戦後の一八〇度の転換の観点からの断罪を同じレベルに扱いたくはない。むしろ特定の状況下で果した積極的な機能が注視されねばならない。

ところで、フアジズムの一形態としての農本主義に多少ふれておきたい。農本主義は、フアジズムとしての構成要件たる軍事力強化、軍需工業を中心とする国民経済への転換という現実の要請と直接的には合致しないが、「そこでフアジズムが觀念の世界から現実の地盤に降りて行くに従つて農本イデオロギーはイリュージョンに<sup>6)</sup>化」して浸透していった。それは大まかにいって、山崎延吉や加藤完治のような農政官僚の尖兵・中核となつて、農業技術の普及や精神主義的な自力更生運動などの展開により現実の農村に生れた有用な生活の思想としての農本主義をバネとしていた。いうなれば、農民の農本的感情に実利・實際的農本主義が果した形でくい込むことによつて、農本フアジズムができて上がったので

はなからうか。もっとも、少なくともフアシズムにとって、農本主義は表面上矛盾概念としてあったわけだが、矛盾は外在化され「極対立化されることなく、むしろ矛盾はそのまま均衡化され生成の論理」に組み入れられるという日本的心性の業で、矛盾が解消されていたのだから、それは政治的には「人間を自然に還元させることによって、権力からの自立をめざす」<sup>16</sup>一方の色合いを帯びた、自然の内的法則との融合「一体化」の発想に根ざしたものと考えられる。

「日本の原始新嘗祭はイニシエーションと農業呪術の統一されたものであるという特徴をもっている。呪術師または族長は、きびしい物忌みによって死を演じ、復活して若々しい、潑刺たる肉体を回復すると、ヒエ、アワなどの初穂を口にすることによってみずからその穀霊と化し、聖婚によって大地の豊穡を予祝する。自然の循環に歩調をあわせ、自然の死とみずからの死を一致させ、穀霊へと昇華することによって大地に復帰し、自然と一体化する。死と復活に媒介された植物的自然の循環性にもとづく無限連続性と、厳格な儀式を媒介として融合する」というのが日本の原始心性だと指摘されている。まさに農本主義者の心性にもろに連っている。それ故にこの心性を捉えることが支配の思想に不可欠となる。昭和のフアシズムは農本思想を土台にしたイデオロギーではあってもイコールではない。農本思想の根っこはもっと深く、その存在の幅ははるかにひろい。したがってフアシズムは崩壊しても農本思想は、日本人にとって「社会化された自然」の基礎となつて存続しているともいえる。

以上みた歴史的カテゴリーである農本主義は、日本人の心性に根ざした農民の「農本」的實在感に依拠した一つの時代精神でもあった。それは権藤思想などを東洋的無政府主義とするような革命・変革の思想として受け入れられたのではなく、日本人の存在の思想としての部分が受容されたものではなかったであろうか。この意味で「農を本とする」思想の根は深い。

ともあれ、マルクス主義は別にして、農青・農本思想（主義ではない）には、農村は前者には変革的に、後者にとっては保守的に擁護されていた。だから農村・農業を侵害する資本や資本の論理は排斥される。都市はその具象である。資本の論理は一切を貨幣に還元するから、価値は一元化され量化される。農本思想はその論理に反逆する。現在において別の価値体系を模索する可能性の芽をやとしていく。

以上の様な仮説を一応立てておく。

(次号につづく)

- 注
- 1、『日本農業における資本主義の発達』 神山茂夫 二頁。
  - 2、同前。
  - 3、『レーニンの農業理論』渡辺寛 一一八頁。
  - 4、『農業問題の基礎理論』梅川、東井他 二二三頁。
  - 5、渡辺寛、前掲書。
  - 6、梅川他、前掲書。
  - 7、渡辺寛、前掲書。

(72頁に続く)

11・10	夫の暴力から逃れ自立をめざす女たちの家を創ろう 決起集会	10	国際婦人年記念日本婦人問題会議(天皇 出席)
11・23	侵略Ⅱ差別と闘うアジア婦人会議大会		
12	女解放労働組合合宿(北海道)		
12・5~8	国際婦人年をきっかけとして行動をおこす会総括 集会		
12	3ポイント解散(一九七六年三月ホーキ星設立)		
12	ウーマンズ・ハウス(名古屋)設立		

△編集部より▽

前号に引きつづき年表構成「ウーマン・リブの歩み」の後半を掲載しましたが、前号で予告していたアンケート「おんなの共同体、これから——明日へ向けての試み——」の集計・報告は、その後の取り組みが遅れており、掲載を延期させていただきます。

このアンケートは、リブが即時的解放、「いま、ここから開始される」解放のために組み始めた共同体の、ここ数年にわたるさまざまな試みと実践の現状を報告するとともに、女、子供、集団そして生活をどのようにつくっていくかを探っているのかを探ろうとしています。貴重な問題提起を含むと同時に、きわめて示唆的な課題なり考え方の素材が提出でき

るものと思っております。  
乞う、御期待!

(68頁より続く)

- 8、渡辺寛、前掲書。
- 9、『農業問題研究』 桜井隆一 二頁。
- 10、農村青年社の思想・運動は、一九七二年に発行された『農村青年社運動史』にはほぼ全容が示されている。私の論述も全面的に同書に基づいてなされている。
- 11、最近復刻本が出たということなので、容易に入手できるだろう。
- 12、『権藤成卿』 滝沢誠 八九頁。
- 13、『現代政治の思想と行動』 丸山真男 四五頁。
- 14、『農本主義の再検討』 安達生恒。
- 15、丸山真男、前掲書 五一頁。
- 16、『権力の思想と個人の思想』 桶谷秀昭(展望七〇年一月)。
- 17、『伝承の論理』 安永寿延 二二三頁。